

## 徒然草

### ネパールの人民戦争とサパナ隊長の思い出

浅沼 信爾  
一橋大学客員教授

彼女のことを皆、「サパナ隊長 (Commandant Sapana)」と呼んでいた。マオイスト・ゲリラの仲間内で使っている字名、いわゆるノム・ドゥ・ゲール (Nom de Guerre) だ。サパナとは、ネパール語で希望とか願いという意味らしい。本名は、知らない。

10年近く続いたネパールの人民戦争は、2005年末にネパール王国の政府とネパール・マオイスト・ゲリラ軍の終戦合意で終結した。しかしこの間、マオイストは中部山岳地帯のロールパから徐々に勢力を伸ばし、終戦時にはネパールの首都カトマンズと第二の都市ポカラを除く全土を一少なくとも夜間には一席卷した。マオイストにとっては、人民戦争の結末は、勝利でもなく、また敗北でもない。全くの膠着の解決策として、ゲリラ活動を止め、平和勢力として国の政治に参加するための終戦合意だった。

内戦終結の問題の一つは、ゲリラ軍をどのように武装解除、動員解除するかだ。戦争に負けたわけではない軍隊をなくすわけだから、これは難しい政治的な課題だ。2006年11月の包括的平和協定 (Comprehensive Peace Agreement) では、マオイスト軍は武装解除され、集められた武器は国連軍の監視下に置かれた。ゲリラ軍の兵士は、国内のあちこちに設けられた宿营地 (cantonments) に動員解除まで留め置かれることになる。国軍の部隊も、それぞれの駐屯地から外に出る活動はしないことになっている。しかし、なんとなく徳川時代の屋敷内謹慎を思わせるような処置で、マオイスト兵士にしてもれば、実にやりきれないだろうと容易に想像できる。

ネパールでは時間の流れが遅い。物事がなかなか解決しない状況を表してよく「真夜中の5分前」という表現を使うが、ネパールでは「真夜中の15分過ぎ」になっても事態が動かない。例えば、新しい新生ネパール民主主義連邦共和国憲法は、平和協定の9年後の今年ようやく発布され、それもまだいろいろのごたごたが残っている。

マオイスト兵士もずいぶん長い間宿营地に放置された。私は、今から5年前一記録によると2011年1月28日にネパール南部のタライにあるルンビニ (お釈迦様の生誕地として知られている) のマオイスト宿营地を訪れた。人民戦争中を通じ、ネパール各地のマオイスト軍の支配地域に入り込み、積極的なジャーナリスト活動を繰り返していたキショール・ネパールが、私の頼みを聞いて連れて行ってくれたのだ。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> キショール・ネパールは、人民戦争の実態をテレビの番組と新聞への寄稿で国内外に知らしめた。英文の著書に、Kishore Nepal, *Under the Shadow of Violence*, 2005, Kathmandu: Center for Professional Journalism Studies がある。

ルンビニから北の丘陵地帯に柵を設けて作られたのがこの宿営地だった。事前許可は得てあったが、それでも宿営地の入り口では、鋭い眼をした、まだ 20 代前半の女性兵士の歩哨による検査があり、そこから歩きで森の中にある宿営地に入る。一階建ての木造建築の前でわれわれを迎えてくれたのがサパナ隊長だった。ジャングルで戦ってきた証左のような、黒い皮膚と筋肉質の体を持っていたが、小柄でかつ細身。その時点で 14 年のゲリラ歴を持つ 29 歳の知的な眼をした女性だ。人民戦争で戦っていた父と兄弟が彼女の目の前で国軍に惨殺されたのを契機に自身もゲリラに身を投じたという。機関銃を持ち、ロケット砲を担いで、雨のジャングルを歩き回り、合計 7 回の作戦に参加したらしい。穏やかな語り口からは、彼女の戦歴はとうてい想像できない。

彼女は約 700 人のゲリラ兵士のコマンダーだが、宿営地の生活はゲリラ戦以上に難しいと言う。何もすることがないのだ。何もすることがない 700 人の若者に、何とか規則正しい、統制のとれた生活をさせなければならない。しかも、行動の自由—特に移動の自由—を制限されて、数ヘクタールに満たない宿営地の中で、だ。武器は取り上げられたが、軍事訓練は毎日行う。大した教材はないが、社会主義や政治のクラスも開く。それに、丘陵の一角に木工作業場を作り、簡単な家具作りを始めた。宿営地の本部前の庭には、レーニン、毛沢東、それにこの地に共産主義を広めたネパール人の先達の像がおかれている。生活は質素そのもので、われわれのような来訪者にもお茶やコーヒーは出す余裕がなく、白湯だけで我慢してほしいと申し訳なさそうに言う。

それでも、今後どれだけ統制のとれた生活ができるか自信がない。あまり大っぴらにはできないが、若者の何人かは宿営地から忍び出て近くの農村にでかけ、農作の手伝いをし、それが縁で恋人が出来て結婚するという二重生活を送っているが、これは目をつむるよりほかない。もともと近隣の村々はマオイストの支配下にあったところで、村人はマオイスト兵士に対して友好的だ。また兵士たちが平和や秩序を乱すような行いに及ばない限り、若者のある程度の精力の発散は仕方がないと思っている。長い間宿営地に放置されると、つい「自分たち末端の兵士は、政治家になったマオイストの指導者たちに裏切られたのではないか」という疑いが拭い難く、そうなる兵士のモラルは決定的に低下する。

「私も、時々宿営地を離れて近くの大学に潜り込んで、本を買ったり、モグリ学生として授業を聴講したりするのですよ。」と彼女は言った。本当に平和な時代が来たら、大学に入って勉強をし、政治家になるのが希望らしい。

先日カトマンズに行った時に、キショール・ネパールに会って、彼女はその後どうしているか訊いてみた。彼女から、マオイスト軍の一部が新生ネパールの国軍に吸収されたときに志願して国軍に入隊した、という答えをもらったのはその数日後だった。何時の日か、軍人サパナ、あるいは政治家サパナに会って、その後の話をしたいと思う。